

— チェルノブイリに思いをよせて —

ポレーシェ



祝！「信田沢搾油所」オープン

南相馬農地再生協議会 理事 奥村健郎

7年越しの悲願であった南相馬信田沢（しだざわ）搾油所の開所式を、2018年2月10日、来賓および関係各位の出席のもと盛大に執り行うことができました。関係者の皆さまに改めて感謝申し上げます。農地再生協議会は、自然環境が汚染された現実を踏まえて、地域社会の再生を目指すため、2012年以降南相馬で生産した菜種を、栃木県の有機栽培研究所に依頼して搾油を行い、2014年食用油「油菜（ゆな）ちゃん」を商品化しました。現在までに6次化商品として「油菜マヨ」や「油菜ドレッシング」「なのはなバーム」などが誕生しています。2016年には、世界的化粧品メーカー「LUSH」が、油菜ちゃんを原材料とした石鹸「つながるオモイ」を販売しました。これらの事から、一刻も早い地元での搾油所建設が望まれてきました。そのような中、南相馬市より土地および建物を無償貸与いただき、さらには国際ロータリー2530地区（福島地区ロータリー財団）および福島大学未来支援センター連携のもと、搾油機および関連施設整備にご支援をいただき、このたび完成に至りました。保健所の許可も無事に下り、現在4月以降の本格搾油を目指して、試験搾油を行っておりますので、機会があれば是非見学においでください。



〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 高畑支店(店番号297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

南相馬便り

(神野 英樹)

★祝！おめでとう!!

2月10日、待望の「信田沢搾油所」開所式が、50名を超える関係者の列席を得て、盛大に執り行われた。ご来賓の方々からは、激励や支援の約束のお言葉を、数多く頂戴した。後半のセレモニーは、「搾油機にナタネを投入」→「搾油機 起動」→「搾油スタート」と進み、間もなく搾油機からナタネ油が流れ出すと、相馬農業高校の生徒さん達によって「くす玉」が割られ、「祝！おめでとう!!」の短冊出現とともに、場内は大きな拍手に包まれた。

今まで「搾油」は、県外に委託していたが、この搾油所の開設により、「菜の花の栽培」～「ナタネの収穫」～「ナタネ油の搾油・濾過・瓶詰め・栓打ち・シール貼り・梱包」まで、一貫した「南相馬産」が実現することになる。



また、ナタネの輸送費削減や生産キャパの大幅増などにより、収益性が改善され、農業の復興・再生の基盤を強化することに繋がることが期待される。今後、当搾油所の稼働率をいかに向上させていくか（ナタネ生産量の増加と販路拡大が鍵）など、問題は山積しているが、南相馬の農業復興にとって、夢がまた一つ実現したことは間違いない。

★進む 新商品開発！…「油菜ちゃんドレッシング(ごま味)」

相馬農業高校の生徒さん達による新商品開発が進み、「試作品」が完成した。そのレシピは、「油菜ドレ（ごま味）！」（なんと「油菜マヨ」入り）。この活動は、「ポレーシェ162号」でも紹介したように、「復興ビジネス2017」というコンテストで、「学生の部最優秀賞」と「東日本JR賞」をダブル受賞して、高い評

価を受けた。現在、早期発売を目指して、最終の詰めを行っている。乞うご期待！

★ 第15期 測定隊が行く！

(4月14・15日&21・22日)

今回より、南相馬市・浪江町・富岡町の測定を同時期に開催し、1枚の合体マップを作成する計画を進めている。参加者の確保が心配されたが、幸いにして「地元の案内メンバー」「県外からの応援メンバー」をあわせて、述べ102名ものご協力が得られ、51チームを組んで同時期開催が実現することとなった。なお、「測定隊」継続の資金面においては、いつも苦勞の絶えない私達であるが、今回はLUSH社から補助金をいただけることになり、「10年間は続けたい」という我々の願いは、綱渡りのようにではあるが、叶えられ続けている。

★「菜の花 花見会」開催！ 参加者募集中！

今年も、「菜の花花見会」を4月28日(土)に開催する。今回は、2月10日にオープンした「信田沢搾油所」の視察も、コースに組み込んだ。満開の菜の花畑（秋に「種まき会」を開催した圃場にて）・搾油所視察・油菜ちゃんを使った料理を堪能し、大いに交流を深めていただきたいと思います。思っている。



4月28日(土) 10:00～15:00
参加費：おひとり 1,500円(高校生以下無料)

詳しくは、

再生協事務局 Tel: 0244-23-5611 まで。

★311 追悼式典の祭壇に「菜の花」が！

その時(3月11日 14時46分)、私達は、「菜の花サミット in 南阿蘇」から南相馬に帰宅する道中(友部SA)で、海に向かって黙祷を捧げた。NHKの特番は「311 追悼式典」を放映していたが、その中で印象に残ったことがある。それは、白い菊の花とともに、「菜の花」が「フクシマ復興のシンボル」として祭壇に供えられていたこと。

「LUSH サミット 2018 (in イギリス)」 イベント参加報告 (杉内 清繁)

かつて経験のない、東日本大震災 福島原発事故・・・、あの天災と人災の大きな痛手を目のあたりにしてから、もう 7 年の時が流れてしまいました。今も、当時の情景は深く心に染みつき、それを背負いながらも、少しずつ新たな歩みに向けて進むことができました。これまで、多くの皆様と出会い、支えられ、そして共にたどり着けた現実に、今も驚くばかりです。

震災直後、原発事故による放射能汚染という現実の中で、自分の生まれ育った故郷に、二度と戻ることのできない厳しさを強く描きながら送った日々を、忘れることができません。そして、自分たちが生きていくための根底を、奪い取られてしまうことに、憎しみと無念さを隠すことができませんでした。

遡ること 32 年前の 1986 年、遙か離れたチェルノブイリで起きた原発事故は、地球規模の放射能汚染が叫ばれる中、その原発から飛び散った放射能汚染の防止に向き合い、直接かかわった多くの痛ましい命を奪い去りました。

今、私たちは、心の支えとなる「故郷の再興」を一途に見つめながら、小さな取り組みの中にも、先を見出す機会に出会い、確実に新たな展開を始めることができました。そのきっかけは、32 年前に起きてしまった放射能汚染事故で、わたしたちの国土とは比較にならないほど広大な大地と向き合い、農地の再生に挑戦した貴重なお話「菜の花プロジェクト」でした。

私たちが震災後に始めたナタネ栽培は、放射能汚染で行き詰る地域社会の閉塞感を打破し、農地の保全につながる取り組みとして広がり始めています。この取り組みを通して、多くの面で「希望」を感じ取り、厳しい中にも事業展開の大きな方向性を見い出せる様に思ってきました。このナタネによる「菜の花プロジェクト」は、地域の農業高校の若い皆さんと一緒に取り組む機会に恵まれ、商品展開の大きな第一歩となる「油菜ちゃん」が誕生しました。これは、世代をこえて、共に学ぶ機会を作り出しています。

このような取り組みを続ける中、ある日「農産品」の分野を超えて、英国の石鹸メーカー LUSH からお話が来ました。当初、海外とのつながりは到底視野にはありませんでしたが、話を辿るとチェルノブイリ救援・中部の方につながることも知りました。私どもが菜種油を LUSH に納めてできた最初の商品が、「つながるオモイ」です。六次化産業として期待される商品の一つとして、育てていきたいと思えます。

この度は、英国にある LUSH 本社で年 1 度開催されるサミットに招待され、油菜ちゃん誕生などの話をする機会を与您いただきました。そして、第 2 弾の新商品発表にも巡り合うことができました。



新商品【MINAMISOMA】

この新商品の名前は、ずばり「MINAMISOMA (REGENERATIVE SHOWER OIL)」(「ミナミソウマ」再生 シャワー用オイル)です。

世界各地から原料調達し、その中で進められる自然環境保護から人権擁護・動物愛護など多岐にわたる取り組みについても、印象に残るサミットでした。また、LUSH ジャパン社は、南相馬農地再生協議会と共に取り組んできたフクシマ支援活動を、オルタナ社主催のコンテストに応募し、見事「グリーン・オーシャン大賞」の栄誉に輝きました。今後、自然環境の保護とビジネス CSR 活動の面からも、期待されていると聞いています。

これから、私どもの地域社会においても、次世代につながる、循環型の地域社会、持続可能な自然環境の創造を視野に入れ、世代を超えたコミュニケーションを介して、引き続き歩んでいきたいと思っています。



311 東日本大震災追悼式・2018

～名古屋から東北へ、追悼の想いをひとつに～

(戸村京子)

2011年3月11日から7年が経ちました。今年も名古屋から東北へ、「多くの命が奪われたことを忘れません」という追悼の想いをひとつにする、5回目の追悼式が、矢場公園(名古屋市中区)で行われました。

東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや実行委員会の主催で、(認定 NPO) レスキューストックヤードをはじめとする 13 団体によって準備されてきました。後援団体は、東日本大震災の被災地 岩手県・宮城県・福島県・被災地 15 市町村、愛知県・名古屋市等。

朝から、例年のように、10,000 本を超える追悼のキャンドルを、名古屋学院大・復興支援チームあすなろ等の大学生・高校生が、「追悼東日本」の文字形に設置しました。今年もチェル救からは山盛さんと戸村が参加して、記帳コーナーなどを担当させていただきました。記帳や献花台には、時折吹き荒れる春の強風の中、参加者の列が伸びていました。今年は白とピンクの花に黄色い菜の花が組み合わされ、より一層復興への願いが表されているように感じられました。

被災地からの県外避難者もご家族連れで集い、発災時刻の 14:46 には全員で被災地の方向へ黙祷し、祈りを捧げました(昼間参加できない人々のために 17:46 にも黙祷しました)。7年の歳月、避難者の方々はそれぞれの想いを抱えて避難生活を送り、また被災地復興の進み方を横目にしながら、今後の暮らし方に想いを巡らせていたのではないのでしょうか。この節目の春に、子どもの進学を機に、幾家族かが故郷へ帰還されます。なお戻るかどうか決めかねる、多くの家族がおられます。特に福島からの避難生活は、先が見えず続いていきます。それは、災害国日本の、原発再稼働の動きが止められない日本の、私たちの姿なのだと思います。

それにしても、小さかった子ども達が避難先の地で成長していく姿は、まさに時の流れを体現していて、驚きと楽しみ、希望を感じさせてくれます。そして「被災者の声に耳を傾け、私たちの備えを怠りません」という追悼式の宣言を唱えながら、被災者支援に携わる者として、被災者に寄り添い、教訓から学び、災害を乗り越えるために人と手を取り合って生きていくことを、改めて胸に誓う一日でした。

同胞である日本国民と

「チェルノブイリ救援・中部」のすべての皆さまに

2018年3月6日

ジトーミル州の慈善基金「チェルノブイリの人質たち」代表 ボリス・チュマク

2011年3月11日という日が、私たちの心に痛みと悲しみを刻んだ時から、さらに1年が過ぎました。この宿命の日、皆さんの国は地球規模の悲劇の薄闇に包まれたのです。それは何の罪もない人々の命を奪い、何千人もの日本人の未来を破壊しました。

ウクライナの私たちも、すでに32年、チェルノブイリの原子の災厄の重荷を背負っています。ですから、日本での悲劇的な出来事と日本国民の方々の不幸を、誰にもまして、我が事のように深い理解をもって受け止めているのです。日本の地で亡くなられた方々のご冥福を祈って、私たちは深く頭(こうべ)を垂れます。

原子力の災厄の開いた口に、それと闘うため飛び込んで行ったすべての人たち、またこの災害を他人事とせず、今も惨事の影響を克服していくため、全力を尽くしている人たちの前に、頭(こ

うべ)を垂れます。

私たち、元消防士のチェルノブイリ原発事故の事後処理作業員たちが、ジトーミル州のすべての消防士たちと同様、心も魂も日本国民とともにあることを、衷心より請け合わせていただきます。私たちは、私たちがチェルノブイリの悲劇とともに置き去りにされず、事故処理作業員や被災者、汚染地域の住民に命を取り戻させるため、皆さんが支援を続けておられることに感謝しています。困難は私たちを鍛え、国民を団結させます。皆さんが信念を持たれ、無関心ではない人たちの助けを得て、この人災の影響を克服され、日本国民の方々によってなされた善行が、必ずや百倍にもなって返ってくることを私たちは確信しています。

この東日本大震災の悲劇の日、巨大な惨事の犠牲となった方々を追悼して、私たちはろうそくに火を灯します。私たちは常に皆さんとともにあります。

<福島で暮らす私たちが、前に進むための指針>

(小林 友子)

「チェルノブイリ 31 年、フクシマ 6 年～原発事故被災者は心をつなぐ」。この講演会を、福島第一原発事故で避難区域となった南相馬市小高区で、なぜ開こうと思ったのか…。

きっかけは、チェルノブイリ原発事故の被災者が事故から 10 年後に書いた、「チェルノブイリの母親たちからの手紙」でした。これを読めば、同じく原発事故の被災者となった私たちが、これからどう生きるべきか、どんな気持ちで暮らしていけばいいのか、その手がかりがつかめると思ったのです。さらに、現地の人たちに直接話を聞きたいと思い、これまでに 3 度、チェルノブイリを訪れました。

1 度目は、福島原発事故から 2 年半後の 2013 年 9 月。このときは何の基礎知識もなく、ただただ原発事故の被災者と会って話がしたい一心で、現地に向かいました。被災者の皆さんの誠実な人柄、どんなに嫌な質問にも真摯に答える姿を通して、どんなに大変な状況に置かれても前向きな気持ちを失わない人たちがいることを、知ることができました。

2 度目は、チェルノブイリ原発事故 30 年式典への出席のために。このときは、もう 2 度と原発事故が起こらないように祈りを捧げました。

そして 3 度目は、事故が起こってから日本人と手紙のやり取りを長年続けている被災者のボウクンさん、ホステージ基金理事のドンチェヴァさんに、小高区での講演をお願いするため。このとき、日本で作ったクリスマスカードを、ウクライナの子供達に手渡すこともできました。

ふるさとを離れ、大変な思いをしながら、30 年間生き抜いて来たチェルノブイリの人たち。その想いや経験は、福島で暮らす私たちが前に進むための指針となるはずです。

実際、小高での講演会のあと、その様子をテレビで知ったという浪江町の女性が訪ねて来ました。その方は、ご自身の娘さんとボウクンさんの娘さんを重ね合わせて、「心配が安心に変わった」と、穏やかな表情を浮かべながら話してくださいました。浪江町は、自宅に帰れない人がいまだ多い地域のひとつで、私が暮らす小高と同様、そこで暮らす人々はさまざまな不安を抱えています。そんななか、チェルノブイリからのメッセージとアドバイスは、被災者となった私たちに生きる力をくれました。なにより嬉しかったのが、小高にいらしたボウクンさんとドンチェヴァさんが、笑顔を絶やさず楽しそうに過ごしていたことです。私が好きなウクライナのボルシチを作ってくれたことも忘れません。

代々受け継がれた旅館でお客を迎える、ありふれた日々を過ごせる幸せ。この幸せがもう二度と壊れないようにと、願わずにはいられません。



〈私たちは、子や孫に語り続けねばなりません〉(カテルィナ・ポウクン)



私、カテルィナ・ポウクンは、「チェルノブイリ救援・中部」に対して、皆さんの素晴らしい国へのご招聘に感謝し、この旅から得た自分の印象についてお伝えしたいと思います。

ウクライナと日本は、同じ災厄によって結び付けられており、私たちは皆さんとの友情をとてとても貴重なものと思っています。ウクライナ国民は、チェルノブイリ事故の後最初に救いの手を差し伸べてくれた国が日本であるということを知っており、それに対してとても感謝しています。

私たちウクライナ人は、恐ろしい福島第1原発事故を経験した方たちのお気持ちがわかります。彼らは、自分の子ども達の健康と将来をとてとても心配しています。彼らには特別な配慮と同情が必要です。悲劇が起こってから、まだほんのわずかな時間しか経っていないのですから。

でも時間は、よく言われるように、よい医者です。そのことを私たちは自ら感じました。

交流は4つの町で行われました。福島県の小高、長野県の松本と伊那、愛知県の名古屋です。

私たちは、福島第1原発から15kmのところまで行き、帰還困難区域が7年の間にめざましいテンポで縮小されている様子を見ました。避難が行われた街々を見ました。とても美しく、住みやすそうなところでした。

福島原発周辺は、チェルノブイリとは非常に異なっています。自然のなすがままになっているのではなく、高度に技術の発達した文

明が人を失った状態でした。

福島汚染地域のことをとても憂えている方々とお知り合いになれたのは、嬉しいことでした。小高に住んでいる小林さん一家です。小林さんたちは、彼らと同じように献身的にボランティア活動に参加している人たちに宿を提供し、本当に多くの労力と時間を、汚染地域での生活を復興するために費やしています。とても興味深い、ナタネ油の製造現場にも行きました。その生産量は着実に増加しています。日本の友人の方々に学ぶべきことがここにあります。農家の人たちとお知り合いになる機会もありました。温室栽培をしたり、有機農業に携わったりしておられる方々です。食品の放射能測定室も見せていただきました。

松本では、白鳥の泳ぐ湖を訪れたことが記憶に残りました。地球上のすべての白鳥が、そこで出会うために集まってきたかのようでした。その美しさから目を離すことができませんでした。古い松本城の壮大さにも驚かされました。伊那についても大変いい思い出があります。伊那の町は、ウクライナのカルパチア山脈に近いトゥルスカヴェツに似ています。伊那の交流会では、チェルノブイリ原発事故後のウクライナ人の暮らしに関心を持たれた方々から、たくさんの質問がありました。そして私たちの旅の終わりは、「救援・中部」の事務所がある名古屋市でした。スタッフの戸村さんと河田さんが出迎えてくださいました。チェルノブイリ惨事の被災者の支援に多くの労力を費やしてこられた、素晴らしい方々です。ウクライナとの協力は、チェルノブイリ原発事故の被災者への同情の意を表した、戸村さんのお手紙から始まったのですから、彼女には特に敬意を表さなければなりません。素晴らしい名古屋の町を見学させていただき、神社を訪れて幸運にも梅の花を見られたことに、本当に感謝しています。道路がよく整備されていることが強く印象に残りました。ホテルでも他の施設でも、どこに行っても清潔さが貴ばれていることが感じられました。日本の現代の建築は非常に美しいもの

です。

「救援・中部」のスタッフやメンバーとお知り合いになりました。自分たちの活動に献身している、すばらしい方々です。原さん、山盛さん、美知江さん、英樹さん、松浦さん、サリーさん、しぐれさん、上田さん…。

通訳なしで過ごさざるを得ない状況もありました。私は心配しましたが、言いたいことはわかっていただき、気軽に交流することができました。そのことに本当に感謝しています。

伝統的な日本食（魚・海藻・野菜の煮物・豆腐・果物・緑茶）は、とても気に入りました。健康にとってもいいものです。おそらくそのために、日本は最も長寿者の多い国なのでしょう。

改めて、心からご招聘に感謝し、皆さんのすばらしい国の方々すべてが、平和と心の安らぎ、よいご健康に恵まれますようお願いしたいと思います。

私たちはチェルノブイリの事故や福島の事故を忘れず、子や孫に語り続けなければなりません。共通の不幸が、遠く離れているにもかかわらず、私たちの国を結び付け、そこから日本とウクライナの両国民の間に強い友情が育ったことを、語らなければなりません。



〈同じ不幸で結ばれた二国民〉

（ホステージ基金 エヴゲーニャ・ドンチェヴァ）

今日この記事で、私は自分の2月の日本訪問での発見に、より多くの文字数を費やしたいと思います。私たちの基金は、すでに 28



年以上、日本の団体である「チェルノブイリ救援・中部」と協力しており、5年前には新たなパートナーの CheFuKo 基金も現れました。つまり私にとって、日本の文化・伝統・遺産は、すでに仕事と生活の一部になっています。でも日本を訪れるたびに、また日本の派遣団を迎えるたびに、私は何かに驚き、自分にとって、自分の活動にとって、新しいことや知らなかったことを発見するのです。

プリピャチ市からの移住者であるカテルィナ・ポウクンとの2月の旅で、私たちは日本の東の沿岸部（小高）、中心部（松本市と伊那市）を訪れ、そこから南（名古屋市）に下りました。太平洋の岸も、山々も、そして日本の名高い都会的風景を備えた大都市も見ることができました。いろいろな方にお会いしましたが、何よりも驚かされるのは、日本人の団結力です。ウクライナでは共同体意識といわれるものです。村・町・ヴォランティア仲間の、あるいは精神的な…。それは、自分自身の安全を含め、多くの問題を解決することができる小さな国のようなものです。

2012年、福島第1原発の惨事のすぐ後に、私は福島県を訪れ、自分の目で津波の後の巨大な破壊のさまを見る機会がありました…。恐ろしく、痛ましく、悲しいことでした。すでにその時、日本各地からやってきていたヴォランティアの姿に驚かされました。彼らは、特別に注目を集めようともせず、黙々と作業をこなしていました。その中に多くの若い人たちがいたのは嬉しいことでした。つまり彼らは、自国の将来を大事なものと思っているのです。2018年、私は以前訪れた場所を再び車で走り、改めて驚きました。崩れた家々や

町を思い出させるものは何もなく、ただ更地と静けさがあるだけでした…。たった6年間に、巨大な作業が行われたのです…。

でも、今、日本国民の皆さんにとって、事故の影響について考える時が来ています。それは、私たちの講演会に来られた日本の方々の目に、はっきり見て取ることができました。実質上すべての質問は、暮らしの安全と郷里を救うことに関わっていました。恐怖・未知の状態への不安、それから闘い…自分たちの権利・自分たちの暮らしと健康・自分たちの子どもたちの健康、放射能で汚染された、生まれ育った土地での生活の復興を守るための闘い…。

日本とウクライナは8000kmの距離に隔られているにもかかわらず、私たちがとてもよく似ていることを指摘したいと思います。小高に住んでいる人たちは、自分たちの地区の暮らしを復興したいと思い、さまざまな解決の道を探り、心を痛めながら、ウクライナではどうだったのかと尋ねてきました。一方、事故後松本に移住した人たちは、2011年に経験したことを悪夢のように忘れたいと願っています。子ども達の将来と健康を考えている若いお母さんたちです。同様の状況が、私たちのジトーミル州でもありました。年配の人たちは、生まれ育った土地を永遠に去ってしまうことができませんでした。家や両親の墓が、放射線の恐怖に打ち勝ったのです。一方、若い家族は新しい移住先に落ち着き、子ども達を育て、彼らを結婚させ、汚染地域に住む両親を年に一度、祝日に訪ねています。各人が自分の選択をするということなのでしょうが、訪日時の私たちの課題は、ウクライナと同じように、これらさまざまな巡り合わせの人たちを励ますということでした。

もう一つのことに触れたいと思います。私たちの基金が設立されてから30年間ずっと、私たちはチェルノブイリ原発事故の事後処理にあたった人たち、事故処理作業員たちと移住者たちの支援をしてきました。それは彼らの悲劇であり、彼らの苦しみです。でも近年、私たちはある傾向に気づきました。チェルノ

ブイリを知らず、一瞬にしてすべてを失ってしまうということがどんなに恐ろしいかを理解していない世代が、育っているということです…。ですから、若い世代が私たちの活動の一つの対象になりました。私たちは彼らに、原発事故の影響について、チェルノブイリと福島についてもっと話したいのです。これは私たちの歴史なのでから。

今、私たちはいくつかのプロジェクトに携わっています。私たちは、日本とウクライナの子ども達に私たちの悲劇について語りながら、同時に両国の伝統や文化について教えることで、彼らを結びつけようとしています。それは興味深く、また将来性のあることです。

訪日の際、私は愛知学院大学の学生たちと会うことができました。ジトーミル市の第25番学校の生徒たちと交流している学生たちです。講演に来て、彼らは初めてチェルノブイリについて聞き、今、福島の悲劇の影響についてよりよく理解するようになりました。同様に、ウクライナの生徒も、福島という言葉の意味がよりよく理解できるようになったのです。

福島事故の7周年にあたって、私たちはウクライナの学校のいろいろな生徒たちに、「チェルノブイリ - 福島：二つの悲劇と一つの問題」という題名の作文を書くよう依頼しました。そして誇りを持って言えるのは、子ども達がこの二つの言葉の意味を理解しているということです。

このような文化交流は必要不可欠なもので、私たちはこの友情が続くことを強く願っています。ですから、私たちの国ウクライナのことをもっと知りたい、あるいは放射能に汚染された地域での影響を克服する私たちの経験について聞きたい、または単に友だちを作りたい日本の方々に、私たちは呼びかけます。あなたたちに友情の手を差し伸べます！

皆さんがお幸せで、よいことに恵まれますよう。





* 松本市での懇談会(2月14日)

ドンチェバさんとボウクンさんが松本に見え、懇談会がチェルノブイリ連帯基金の建物で行われました。当初の予定では、お二人は南相馬だけに見えるということでしたが、せっかくの来日の機会であり、松本・伊那市・名古屋でも講演会などができないかと南相馬の担当者にお願ひし、南相馬市以外の3か所での講演会などが実現しました。

前日に松本入りしたお二人は、疲れも見せず翌日には早起きして、私の案内で豊科町の犀川に飛来している白鳥見物に行きました。ドンチェバさんは、白鳥を驚かせて飛び立つ瞬間を写真に写したいと言い出しましたが、私の駄目出しであきらめるとい一幕もありました。その後、松本城見学をしました。夏ならば何時間も待つところを、冬なので待つことなく見学できました。お城の中では、鉄砲を打つための穴から眼下を見下ろし、写真を撮っていました。

午前11時頃、連帯基金の事務所到着。連帯基金ではお二人の為に手巻きずしの準備が行われていて、お二人とも喜んでいました。午後1時ごろから懇談会が行われました。懇談会といってもミニ講演会のようなもので、ドンチェバさんからは、事故以後のチェルノブイリ救援・中部との付き合いの中で行ってきた、避難者の移住プロジェクトや事故処理作業員への支援、ミルクキャンペーン等の取り組みが報告されました。ボウクンさんからは、事故当時のチェルノブイリ原発の労働者の町プリピャチの様子や、その後の避難などが語られました。

松本会場には、福島から松本に避難されているお母さんの参加もあり、経験者だからこそ分かり合えることもあったようでした。松本での懇談会終了後は、ドンチェバさんが温泉に入りたいとのことで、急遽、かつて殿様が通ったという温泉に行きました。

* 伊那市・南箕輪村でのウクライナ料理の会・講演会(2月15日)

15日は午前10時から、お二人の泊まっているロジック吹上の台所を使わせてもらい、ウクライナ料理の講習会を開きました。料理はボルシチとヴァレニキ、伊那の仲間10数名が参加し一品持ち寄りの楽しい交流の場となりました。

夕方からは、南箕輪村民センターで講演会が行われ、30名がお二人の話に耳を傾けました。事故当時の生の話を聞く機会のない伊那の人達からは、質問も多く出て良い機会になりました。

* フクシマを忘れない！ 3・11 上伊那アクション開催

毎年3月11日に、伊那では「フクシマを忘れない！」集会や会合が行われてきました。昨年は午前「さよなら原発グループ」が集会とパレードを行い、午後からは「チェルノブイリ救済・伊那グループ」が、放射性廃棄物処分を巡る映画「チャルカ」上映会を行いました。今年は3・11をもっと多くの人達に広げようという事で、実行委員会を作り準備してきました。集会もリレートークを中心に、7名の支援者、避難者などのお話しとパレードも行いました。

午後からは四ノ宮浩監督の「わすれないふくしま」を上映しました。取り組みが功を奏したのか、集会は230名、映画会は122名が参加しました。半年の準備は無駄ではなかったと思います。



ボウクンさん ドンチェヴァさん ようこそ名古屋へ！

雪がちらつく2日17日、ブラザーミュージアムにおいて、ボウクンさんとドンチェヴァさんの講演会を行いました。一週間前に日本に降り立った二人は、南相馬市小高区、松本、伊那と、寒い地域を巡った後、やはり寒かった名古屋に、講演会前日到着。さっそくチェル救事務所に来てくれました。そして、夜は交流会を開催。名古屋の「日本ウクライナ文化協会」のメンバーの方も参加し、ウクライナ語・日本語・英語が飛び交う、にぎやかなひとときを過ごしました。



〈菜の花いっぱい〉

講演会当日朝は、貪欲に名古屋を満喫しようとするドンチェヴァさんに従い(?)、栄オアシス 21、熱田神宮を観光したあと会場入り。会場は「ブラザーミュージアム」。場所は堀田駅から徒歩数分、名鉄・地下鉄どちらからでも便利な会場で、設備も充実しており、6月に行う定期総会でもお世話になります。

さて会場に入れば、満開の菜の花畑が来場者をお出迎え。渥美観光ビューローさんじきじきに届けてくださった菜の花です。お帰りの際には、みなさんにお持ち帰りをしていただきました。

参加者は今回 80 名ほど。直前のマスコミ攻勢が功を奏し、定員 100 名の会場は、椅子が足りなくなるほど。お越しくくださった皆さま、本当にありがとうございました。

講演会は、終始なごやかな雰囲気の中、ボウクンさんは、

原発事故から 30 年間の生活を語られ、またドンチェヴァさんは現在の被災者の厳しい現状を報告し、聴き入っている参加者は、皆真剣そのものでした。

ボウクンさんのプリピャチからの脱出劇は、そのときの緊迫感が伝わってきました。もし脱出できていなかったら、ボウクンさんはその後どうなっていたのでしょうか。

ドンチェヴァさんは、フクシマとチェルノブイリの被災地の違いで、浪江の視察のとき「まるで 10 分前まで人がいたようだった」と感じ、人が暮らしているすぐ近くに汚染土壌が保管されていることに驚いていました。また、ウクライナは他国の核廃棄物を受け入れ、その資金は国の予算に組み込まれている、とのことでした。

体調に自信がなかったボウクンさんは、訪日を迷っていたそうです。でも、娘アヌーシカさんの強い後押しがあり、決意してくれました。帰りは、お孫さんへのお土産、ポケモングッズをスーツケースいっぱい詰め、帰国の途につきました。(市原)



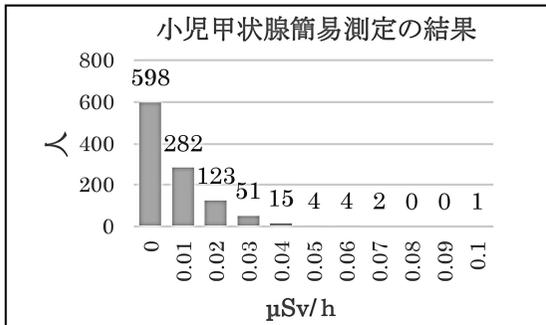
〈講演会后、セントレアで最後の一枚！〉

福島県の小児甲状腺がん (2)

福島の小児甲状腺がんは、最近 196 名になった。しかし県や国は、この増加を被曝が原因とは認めない。その理由は、「子ども達の被曝が極めて少ないからだ」という。果してそうだろうか。調べてみると、事故直後の福島の子ども達の甲状腺の被曝線量を実際に測ったのはたった 2 例しかない。1 例は、国の原子力委員会の委託を受けた県の原子力災害対策本部が、3 月 26 日～30 日にかけて、川俣町・飯館村・いわき市の合計 1,080 名の 15 歳以下の子ども達の甲状腺のヨウ素 131 を測定した事例。もう 1 例は、弘前大学が事故から 1 か月後の 4 月 11 日～16 日に 62 名を測定した事例。チェルノブイリ事故後 1 か月半に、13 万人の小児甲状腺を測定したウクライナとは、比べようがない。

被ばくが少ない根拠とは？

下の図は、原子力委員会が 2011 年 9 月 5 日に発表した 1,080 名の測定結果のまとめである。



甲状腺の被ばく検査は、喉にシンチレーション式の測定器を当てて、放射線の強度を測り、その値から環境放射能の強度(バックグラウンド=BG)を差し引いて正味値(μSv/h)を出し、その値から計算で被曝線量を出す。ICRP によれば 1 歳児の甲状腺に I¹³¹ が 4,400Bq あれば、正味値は 0.2μSv/h を示し、その時の被曝線量は 100mSv となる。上の図では 596 人(55.4%)が 0 μSv/h で、全て 0.2μSv/h 以下、ただ 1 名(0.1%)が最大 0.1μSv/h で、年齢を考慮すると 35mSv に相当するという。こうして数値化されると、如何にも最もらしく聞こえる。だが、実際の測定状況を見ると、このデータは極めて怪しい。

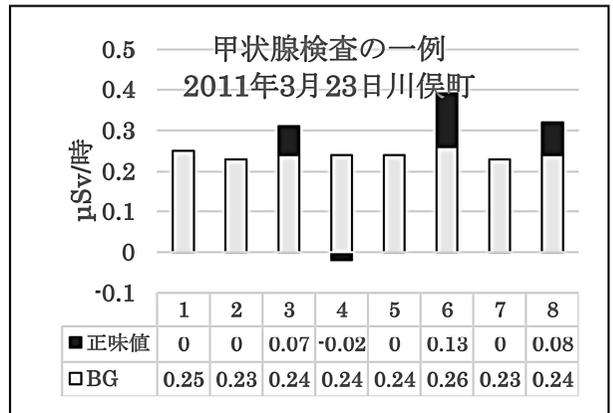
測定の際、被験者の膝に測定器をあてて出た数字を BG とする。喉の測定は 30 秒ずつ 3 回行って平均値を出す。

問題は BG である。本来、汚染が無ければ自然放射能だけで福島県の BG は、ほぼ

0.04~0.05μSv/h だった。I¹³¹ は勿論 0 である。しかし、原発から大量の放射能が飛来し周辺環境を汚染した結果 BG も上がった。I¹³¹ は、セシウム約 10 倍あった。衣服が汚染していれば高くなるし、何より周辺環境が事故前の 10~100 倍にも上がった。

従って検査には、BG の低い場所を探さなければならない。国は BG が 0.2μSv/h 以下の場所を選ぶように指示した。

下図は、川俣町での測定の一例である。



これで分かるように BG が高く、測定値から BG を差し引くと正味値はマイナスになるケースもある。BG が低ければ正味値は上がる。実際は BG にも振れ幅があるので、この正味値の信頼性は極めて低いのである。BG が高い場所ほど信頼度は下がる。川俣町山木屋地区では BG が 2μSv/h もあったため、そこでのデータ 66 名分はさすがに廃棄された。「被曝線量が低い」という根拠は、こんな測定レベルに基づいている。この件については、後日詳細な報告書を出す。

(2018年3月29日 河田)

事務局便り

ボウクンさんとドンチェヴァさんの名古屋講演会は、久しぶりに企画した本格的な講演会であり、どれだけの方々にご来場いただけるものか、不安なままこの日を迎えた。が、なんと大入り満員。講演者のお二人にも力が入った。来場者の方のアンケートに「今日出席したことで分かったことが、たくさんありました。南相馬市からの避難なので、不安なこともあります。母として希望を持って進んでいこうと思います」「たくさん言いたいことがあるということが、よく伝わってきた。30年以上の長きにわたる体験・活動に胸が熱くなります」「もっと知りたい」「こちらの団体しか知らない情報を教えて発信してほしい」等、熱いメッセージ。

今更ながら、アグレッシブに伝える機会の大切さを思った。(山盛)

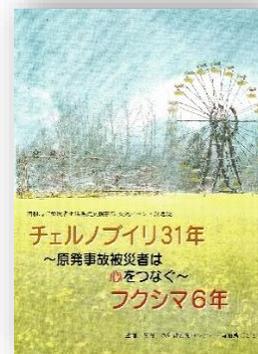
“チェルノブイリ31年 フクシマ6年”

講演会用に「記念誌」を作りました！

南相馬市に「とどけ鳥」を開設して6年…。この間、測定依頼に訪れた市民の皆さまに、チェル救の活動を丁寧にお話する機会はなかなかありませんでした。

南相馬市で講演会を開くことになったのを機に、「記念誌を作ろう！愛知から来ているチェル救も知ってもらおうよ！」と、小高の皆さんに協力をいただき、見事、完成しました。この記念誌には、チェルノブイリ事故後、自らも被災しながら、日々市民のために働いてきた5名の方からの寄稿文も収録されています。ぜひ、読んでください。

事務所に若干在庫があります。ご希望の方はご連絡ください。(美)



編集後記

- ☆ふらっと足を運んだ瀬戸で陶器の米びつが気に入り衝動買い。数日後 TV ドラマを見ていたら同じ形の容器を発見。なんと骨壺。でも私の米びつはかわいいイラスト入りです。(佳)
- ☆「今日は何もしない」を決意。そういう日に限って友人から電話で呼び出し。良い天気の日にも何もしないというのは勿体ないと思い、大物洗濯して大わらわ…朝から始めようね。(美)
- ☆原発事故被災地の真っ只中で生活していると、「原子カムラ」の関係者と議論する機会が多くなる。事故を起こしてしまった率直な感想を聞くと、決まって「想定外」という言葉が返ってくる。今なお自己弁護？ 気持ちは察するが、百歩譲って「(老朽化した) 原発の再稼働に対するご意見は？」と聞いてみる。答えは「厳しくした安全審査基準を守れば…。誰も、次に起こるかもしれない事故を、「想定内」で考えようとはしない。さてそれでは、「原発事故再発はもちろん想定内！」と考えているあなたに質問。…「911 は 内部犯行である」「人工のCO2で地球は温暖化しない」「諸悪の根源は、ロシア(プーチン大統領)ではない」…という情報を、「想定内」として世界情勢の分析をしているだろうか？「そんな『陰謀論』などは聞きたくない(『想定外』だ！)」と云って、思考が停止してはいないだろうか？(J)

〒 456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷 「**エープリント**」

TEL・FAX (052) 871-9473